

平成 19 年度に追加しました 20 本の地域映像の概要を紹介します。  
 実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧いただけます。



**秋田県 由利本荘市 矢島の神明社 八朔祭り**  
 霊山として名高い鳥海山(チョウカイサン)の麓に抱かれて、神明社が鎮座します。初秋、この神明社で、収穫と人々の安全を祈願する、八朔祭りが古くから行われています。祭は町を挙げて、準備から始まり、行事の中心は「若者衆」(42歳までの若衆)が担います。本祭前日「宵宮祭」、神明社で行われる祭りに続いて、神輿の巡幸に移ります。神輿は神明社からお旅所までの巡幸し、これを「お下り」と言っています。その後で各丁の奏者による神楽の競演会が催され、宵宮は終了します。9月第2日曜日「本祭」では、仮装の若者が各丁ごとに、行列をなして踊り、神輿はお旅所を出発、巡幸して神社に戻ると「還御祭(カンギョサイ)」が執り行われ、祭の神事の終了となります。



**福島県 昭和村 からむし織 魂の伝承**  
 昭和村のからむしは、室町時代初期に当時の会津藩主であった芦名盛政(アシナモリマサ)がその栽培を勧めたのが始まりと伝えられています。からむしは苧麻(チョマ)または青苧(アオソ)と呼ばれるイラクサ科の植物です。本映像は、2000年にからむしの栽培、「苧引き(オヒキ)」と呼ばれる繊維を取り出す技術、織りなどの技術を1年間かけて追った映像記録です。からむしの生産工程を追って春の土づくり・からむし焼き・畑づくり、夏の収穫・苧引き、秋の品質鑑定・糸づくり、冬の撚りかけ・経糸のべ・機織り・雪晒(ユキザラ)しなどを紹介しています。(行事開催日: からむし織の里フェア7月下旬、からむし織の里雪まつり2月下旬)



**茨城県 境町 茨城県指定無形文化財 塚崎の獅子舞**  
 塚崎の獅子舞は「オシッサマ」と呼ばれ、五穀豊穡、天下泰平を祈願して、毎年4月15日、7月15日、11月15日、香取神社に演じられています。若人から老人までこの土地の長男のみによって構成された「獅子講」と呼ばれる集団が、獅子舞を受け継ぎ演じてきました。獅子舞の起源は不明ですが、享保2(1717)年の「お獅子講中人別改帳(オシシコウチュウニンベツアラタメチョウ)」が遺されています。また、江戸時代に関宿藩主久世大和守の依頼で雨乞いの舞を奉納し、雨を降らせた褒賞として風がけの井桁本(イゲタホン)の紋を贈られた、との、伝承があります。近隣の村々へも出かけて雨乞いの舞を演じていたのでしょう。昭和35(1960)年、茨城県の無形民俗文化財に指定され、現在に至っております。



**群馬県 前橋市(旧粕川村) 粕川村の伝統芸能 月田の獅子舞 女淵の太々神楽**  
 関東平野の北西にある赤城山のふもとを流れる粕川の恵みを受けてきたのが前橋市粕川町です。粕川町月田地区の近戸神社では毎年8月最終日曜日に例祭として御川降(オカオリ)神事が行われ、獅子舞が奉納されます。室町時代1533年に奉納の記録が残されています。粕川の由来は、赤木山に住む親神が祭祀が無事に終わったことを子神に伝えようとして、粕酒を川に流したことから、この川の名がつけられ、この神事が始まったとされています。御霊(ゴリョウ)神社では、毎年4月中旬、10月中旬に、太々神楽が奉納されます。明治12年に始まり、約130年間続いています。太々神楽は、天下泰平・五穀豊穡を祈念して、奉納されるもので、平成10年からは、保存会を組織して継承されています。



**埼玉県 鳩山町 鳩山町指定無形民俗文化財 毛呂神社 屋台囃子**  
 埼玉県のほぼ中央に鳩山町があります。古代には関東最大の須恵器(スエキ)を出土する窯跡群があります。また、国分寺瓦の生産を担う焼き物の里でもありました。江戸時代には、流し筏(イカダ)の宿場として栄えたといわれています。鳩山町熊井地区には毛呂神社があります。毛呂神社は地域を代表する古社です。7月の第3土曜日、境内の八坂神社の祭りに「屋台囃子」が奉納されます。このお囃子は、江戸の神田囃子大橋流を踏襲しているといわれています。お囃子は、大太鼓1、小太鼓2、鉦1、笛1で演奏されます。楽曲は主に8つで、楽曲に合わせてオカメや火男の踊り、恵比寿、獅子の踊りなど演ぜられます。



**埼玉県 小鹿野町 埼玉県選挙無形民俗文化財 伊豆沢の天気占い**  
 埼玉県西方の秩父地方にある小鹿野町の伊豆沢地区には、諏訪神社の鎮座する杉林で、毎年2月11日に「弓・的(ユミ・マト)の神事」が行われています。この神事により、その年、各月の天気が占われます。この神事の起源は、江戸時代初期といわれ、諏訪神社が勧請(カンジョウ)された、寛永年間と時期が一致します。以来およそ350年続いているといわれています。弓は桃の木、矢は篠竹、弦は麻で作られます。直径2メートルほどの的を3人で射るが、第1矢は1月、第2矢は2月というように、12本の矢を射て、一年間の天気を占います。的の白い部分に当たれば、その月は晴れが多い、黒い部分は雨が多く、的をはずせば風が嵐と占われます。昔は、この占いにより、農作物の作付けを行ったとされています。



**東京都 杉並区 杉並の郷土芸能**  
 この映像は、「高井戸の餅つき唄」から始まり、杉並の郷土芸能を収録しています。「阿佐ヶ谷囃子」は幕末の頃はじまったとされ、毎年9月、神明宮の例大祭で奉納されます。「井草囃子」は1852年阿佐ヶ谷村から伝わったとされていて、毎年井草八幡宮例大祭で奉納されます。昭和51年保存会が結成されました。「高井戸囃子」は下高井戸八幡宮の宮司が伝えたとされ、明治23年皇居前広場で演じた記録があります。「成宗(ナリムネ)囃子」は、明治初期から昭和10年代まで須賀神社境内でみられましたが、人員の不足で一時的に中断したが昭和59年復活を果たし、今日まで継承されています。「大宮前囃子」は大宮前郷土芸能保存会により継承されています。安政2年頃から伝えられている「大宮前里神楽」も残されていて、この地区で唯一の「里神楽」です。9月春日神社例大祭で奉納されます。



### 東京都 <sup>ふっさし</sup> 福生市 <sup>ふっさし</sup> 福生市の無形民俗文化財

“福生の天王ばやし”は、神明社で奉納されています。昭和56年保存会により復活しました。子供にもよく伝承され、一家で3代に渡って演奏するところもあります。“福生祭ばやし”は、明治の初期、所沢の古谷重松(フルヤジュウマツ)が周辺に伝えたといわれ、青年団支部毎に“はやし連”が生まれ、夏祭りに登場するようになりました。その後は、町内ごとに伝承されています。神明社の例大祭当日、各地から山車が集まり、参道でお囃子を演奏します。神輿は境内に参入し、社殿では、夏祭りの無事を祈願して神事が執り行われます。続いて、社殿前で“天王ばやし”が奉納され、神輿は町に繰り出します。“ミキノクチ”は竹で作った正月の縁起物です。現在ではこれを作れる人が、一人になってしまいました。“ピン”“ウ”“ミョウガ”“オモト”などの形があり、郷土資料室で見ることができます。



### 東京都 <sup>ひのでまち</sup> 日の出町 <sup>ひのでまち</sup> 日の出町の祭囃子と伝統の舞

自然と歴史あふれる町、日の出町の無形民族文化財に指定されている幸神社(サジカミジンジャ)の春祭りではやされる祭囃子と奉納される神楽、山祇社の春祭りではやされる長井神田囃子、三嶋神社で奉納される玉の内の獅子舞、春日神社、八幡神社の秋祭りに奉納される八幡囃子と鳳凰舞(ホウオウノマイ)を、各神社の祭り様子とともに紹介しています。玉の内の獅子舞は大頭(ダイガシラ)、雌獅子、小頭(ショウガシラ)、花笠4名、天狗1名、笛吹きで舞います。「七道」、「花掛」、「太刀掛」、「神切」の舞を紹介しています。国重要無形民俗文化財に指定されている下平井鳳凰舞は京都から伝わったとされ、雨乞いや、悪疫退散の舞としても奉納されます。  
(行事開催日:幸神社の春祭り 3月下旬・山祇社の春祭り 4月15日、4月18日に近い日曜日・三嶋神社、玉の内の獅子舞 8月の第2土曜日・春日神社、八幡神社の秋祭り 9月29日に近い土日)



### 新潟県 <sup>いといがわし</sup> 糸魚川市(旧青海町) <sup>とうみおおくら</sup> 田海太神楽

糸魚川市青海地域の田海地区では、毎年4月15日頃に行われる山添(ヤマソエ)社の春祭りに、神社の祭礼とお祝い事の折に無病息災と悪魔退散を願って、獅子舞神楽が行われます。  
田海神楽は、まず四方を踏み清め悪魔払いをする「平獅子(ヒラジシ)」から始まり、次いで獅子と天狗が戦う「面神楽(メンカグラ)」が行われ、神楽の中心的存在である「本神楽(ホンカグラ)」の3種類があります。  
ほかに5つの神楽踊りが伝わっていて「康芝芝(コウケイシ)」、「伊勢音頭(イセオンド)」、「八木節(ヤギブシ)」、「新保広大寺(シンボウコウダイジ)」、「おけさ」がありいずれも優雅な舞いです。以前は各家を廻って舞われていました。(行事開催日:4月15日前後の日曜日)



### 長野県 <sup>いなし</sup> 伊那市(旧高遠町) <sup>れきし</sup> 歴史の町 <sup>しんしゅうたかとう</sup> 信州高遠 <sup>たかとうはやしでんしゅう</sup> 高遠囃子伝承

江戸時代、高遠藩の城下町として栄えた伊那市高遠町には古くから続く寺社が多くあり、中でも平安時代に起源を持つ鉾持(ホコジ)神社は、伊豆・箱根・三嶋の三社を祀る大きな神社で、歴代の高遠城主からも崇められてきました。この鉾持神社の4月15日の例祭で、「山車(ダシ)」とともに囃し歩かれたのが「高遠囃子」です。元禄の頃に流行った能が変化したものと言われ、各町内ごとに受け継がれてきた囃子は、それぞれに曲が異なります。現在は9月23日の燈籠まつりに演奏され、22日の夕刻よりお囃子の行列が町へ繰り出します。往路は「本ばやし」という静かでゆっくりとした調子であるが、復路は「かえりばやし」といって賑やかなテンポの早いものになります。



### 長野県 <sup>あなんちやう</sup> 阿南町 <sup>まつり</sup> 祭りのふるさとあなん ~ <sup>あなんちやう</sup> 阿南町の民俗芸能 ~

長野県の最南端、県境に位置する阿南町には中世の姿をそのままに民俗芸能が残されている。永い歴史と風土が祭を育て、祭人を育ててきた。この地域には、国の重要無形文化財をはじめとする、多くの民俗芸能がある。五穀豊穡を祈って、鉄製の小さな“鍬”を祀る「日吉の御鍬(おくわ)まつり」、重厚な筏を組み上げ、池に浮かべて神をお迎えて無病息災を祈る「深見の祇園まつり」、祖先と新たに亡くなった人のために、念仏を唱えながら太鼓を打つ「和合の念仏踊り」、古く四国や大阪から伝えられ神事として奉納される「早稲田の人形芝居」、囃子方を乗せて村を練り歩く「粟野の囃子屋台」などが紹介されている。この地域は、これらの民俗芸能が確かな形で残されており、貴重な民俗の遺産として受け継がれている。



### 静岡県 <sup>しずおかし</sup> 静岡市 <sup>しずおかし</sup> 静岡市指定無形民俗文化財 <sup>まつり</sup> ヤマメ祭

ヤマメ祭りは、静岡市葵区田代に伝わる、信州諏訪大社(スワタイシャ)の分社として1238年に創建されたと伝えられる田代諏訪神社に、特殊神饌(シンセン)として「ヤマメずし」を奉納する祭りです。ヤマメずしの材料となる粟(アワ)は焼畑で作られ8月10日に収穫され、ヤマメは8月20日に明神谷(ミョウジンダニ)で開催される魚つり祭りで35匹釣り上げられます。ヤマメずしは8月25日に、塩漬けたヤマメに粟飯(アワメシ)を詰めて作ります。本映像では、5月3日の焼畑作り、8月10日の粟の収穫、8月20日のヤマメ祭り、8月25日に村人総出で行う祭りの準備と、8月26日の例祭で4年に一度行われる御輿渡御(ミコシトギョ)や、本殿に奉納される神楽、ヤマメずし献饌(ケンセン)、8月27日の本祭・直会(ナオライ)などを紹介しています。



### 三重県 <sup>つし</sup> 津市(旧美里村) <sup>みなみながの</sup> 南長野かんこ踊り <sup>おどり</sup> 北長野・細野祇園踊り

三重県津市美里町南長野地区では、毎年8月15日に、豊年満作と子供たちの成長を祈願する踊りが行われます。これは江戸時代文久2年(1863年)に始まったと伝えられ、昭和53年からは、地域の保存会により継承されています。踊り手は胸に、豊年を祈る“豊年俵”や“太鼓”を抱き、“しで”を背負って踊ります。この“しで”は、12本からなり、1年12ヶ月を意味します。中央に置かれた、“中太鼓”には、5歳の子供も参加します。北長野細野(ホソノ)地区では、毎年8月15日に、長野神社境内において、スサノオの尊に捧げる踊りとして、豊作・厄病退散を祈願しています。“かんこ”と呼ばれる踊り手は、田植えの装束を付け、胸に“かっこ”(太鼓)を吊り、背に18本の“しで”を背負って踊ります。“宮踊り”は長野神社で、“寺踊り”は地区の遊園地で踊られています。



佐賀県 佐賀市 佐賀県重要無形民俗文化財 見島のカセドリ行事 伝統を次の世代へ

佐賀市蓮池町(ハスイケマチ)に残る「見島のカセドリ行事」は、小正月の行事として、毎年2月の第2土曜日に行われています。起源は定かでないが、古老の話によれば、鍋島侯が蓮池に城を築きその城主になって以来、およそ350年続いているといわれています。雄鳥役と雌鳥役は未婚の男性が勤めます。蓑と笠をつけ仮装することで、神になり、神社での奉納の後、各家を廻って、祝福をもたらす、来訪神(ライホウシン)の行事である。他に「ちょうちん持ち」二人、「天狗持ち」二人、「御幣(ゴヘイ)持ち」一人、「かご担い」二人、謡(ウタ)い三人で構成され、各家を廻ります。佐賀県内で唯一残されているこの行事は、民俗学的にも貴重とされ県の重要無形文化財に指定されています。



熊本県 水上村 緑と清流に育まれて ~ 水上村に伝承される郷土芸能 ~

水上の地名は、球磨川(クマガワ)の源流の地であることからなづけられました。白水(シラミズ)神楽:古屋敷(フルヤシキ)地区では、白水阿蘇神社の秋の大祭が行われる9月23日に「白水神楽」が奉納されます。この神楽は大正時代に、隣の宮崎県椎葉村から伝えられたとされています。千ヶ平(センガヒラ)虎踊り:千ヶ平地区では、大正初期にこの村に伝えられたという虎踊りが村の広場で行われますが、途中で芝居披露され、また踊りとなり、千ヶ平八幡神宮に奉納されます。御嶽(オタケ)さん参りの唄:市房山(イチフサヤマ)で807年ごろ一つの大きな岩が見つかり、霊地として、霧島の神霊を灌頂(カンジョウ)した。縁結びの神として有名になり、ここを訪れる人の唄として伝えられています。川内(カノウチ)の平家踊り:川内地区では、秋に大祭が執り行われ、源平の合戦から題材を得た“平家踊り”が披露されます。“道太鼓(ミチダイコ)”を演じながら16名の踊り手が入場、平家踊りが始まります。上楠(ウグスリ)の白太鼓踊り:村の八幡神社の秋の大祭に奉納されます。まず“頭の庭入り(カシワノニワイリ)”から始まり、次いで“脇の庭入り”となる。勇壮で男性的なこの踊りは、古く源平の合戦から題材を得ています。(行事開催日:9月23日)



宮崎県 諸塚村 吉野宮物語 古を思い未来へと祈る

諸塚村と美郷町(旧北郷村)との村境付近で、足利時代中期(1400年代末)に位の高い盲僧(モウソウ)が所持金をねらった暴漢に襲われ、凶器に倒れたという言い伝えがあり、この盲僧の霊を祀っているのが吉野宮神社であり、別名座頭(ザトウ)さんともいいます。この吉野宮神社付近には、1743年に村人が建てたという供養塔(クヨウトウ)があり、毎年3月28日には、目の神様を崇める、村人達による祭りが行われています。祭りには、村人はもちろん近隣町村から多数の信奉者が訪れ、前夜祭には神社で神官と村人による通夜が執り行われています。この言い伝え、祭りを、映像として語り継ぐことが出来ました。



宮崎県 椎葉村 白太鼓

宮崎県から熊本県にかけて「白太鼓踊り」が古くから伝えられています。「白太鼓踊り」は先祖の霊を供養する念仏踊りが、華やかな衣装を付けた“風流”へと発展したものです。“白太鼓”は白を横にし、これを胸に抱くことから名がつけました。この「白太鼓踊り」は宮崎県側は“背負いもの”を付けるのが特徴で、熊本県側は、戦陣用の兜をかぶるのが特徴となっています。本編では、宮崎県椎葉村で毎年定期的に踊られている、4つの地区、大河内(オオカワウチ)地区、大藪(オオヤブ)地区、桐尾(ツガオ)地区、十根川(トネガワ)地区の踊りを紹介しています。江戸時代には、そのころ庄屋を務めた家の前で踊ったが、今日では、各地域の神社の前等で踊られるようになりました。(行事開催日:9月)



宮崎県 三郷町(旧西郷村) 西郷村の神楽 若宮神楽 尾佐渡神楽 島戸神楽

若宮神楽の始まりは、約 1000 年前と伝えられ、序盤の「地割(ジワリ)」から始まり終番の「稲荷神楽(イナリカグラ)」で終わる全16番編成です。11月22日から翌日にかけて、御神屋(ミコウヤ)を掛け、仮宮(カリミヤ)と定めて舞われる全16番を紹介しています。若宮神楽は、当地域で大切に受け継がれている祭、「御田祭(オングサイ)」(毎年7月の第1日曜日開催)の前日や、11月に収穫祭として行われる、「秋の大祭」で奉納されています。



宮崎県 日之影町 ふるさとに継ぐ暮らしと伝統

本映像は日之影村の人々の1年12ヶ月にわたる様々な暮らしぶり、農業・漁業・林業・狩猟畜産業、多彩な年中行事と伝統芸能、豊かで恵まれた自然の風景を1月から12月までにわたって記録し、変わることなく育まれてきた日之影村の自然と人々の営み、風景と豊かな文化を映し出しています。また日之影町の伝統芸能である日之影神楽(大人(オオヒト)地区、鹿川(シシガワ)地区)、山中神楽、田植え踊り、宇納間(ウナマ)踊り、深角団七踊り(フカスミダンシチオドリ)、宮水(ミヤミズ)人形浄瑠璃、ヤンソレ踊り、大人歌舞伎、古園(フルゾノ)棒術を紹介しています。